

車いすラグビー連盟に社員を外向 組織の内側から積極的にサポート

安心・安全に配慮した野菜、ミールキットなどの定期宅配サービスを提供するオイシックス・ラ・大地株式会社。「これからの食卓、これからの畑」を企業理念に、食の社会課題をビジネスの手法で解決するというミッションの一環で、車いすラグビーをはじめとする、数種目のスポーツを積極的に支援しています。



オイシックス・ラ・大地株式会社

Oisix ra daichi



観戦会



体験会・講習会



ボランティア



協賛

企業情報

オイシックス・ラ・大地株式会社

【住所】東京都品川区大崎1丁目11番2号
ゲートシティ大崎 イーストタワー5階
【URL】<https://www.oisixradaichi.co.jp/>



車いすラグビー連盟の事務局機能を 強化すべく社員を外向

オイシックス・ラ・大地の本格的なパラスポーツ支援は、代表取締役の高島宏平社長が、2017年に公益社団法人経済同友会の「東京オリンピック・パラリンピック2020委員会」委員長に就任したことがきっかけだという。



星氏

「2016年に一般社団法人日本車いすラグビー連盟（当時は一般社団法人日本ウィルチェアーラグビー連盟）のオフィシャルサプライヤーとして関わりができてから、日本代表選手の遠征試合や合宿時に当社商品の食材を提供したり、連盟WEBサイトのリニューアル

など本業を活かした支援を行ってきました。2018年に高島が理事長になったタイミングで同連盟の事務局機能を強化すべく、社員3名を兼務外向させていただくことになっ

たのです」とソリューション事業本部 副本部長兼 アライアンス統括を務める星俊作氏は語る。現在、日本車いすラグビー連盟に「兼務外向」し、渉外委員会を担当している。現在ではさらに支援の幅を広げ、2017年の秋から一般社団法人日本ゴールボール協会への食材支援を開始。さらに健常者スポーツの面でも、公益社団法人日本フェンシング協会への支援を2021年秋から始めるなど、スポーツ全般の食を支える活動を広げている。

部署を超えた有志によりスポーツ支援 チームを組織

オイシックス・ラ・大地では、食における支援に関してプロジェクトチームを組織しているのも特徴。「本業とは垣根を超えた活動を活発にするため、当社には有志による組織制度があり、その一環でスポーツ支援プロジェクトに関わりたいメンバーを募集したところ15名が集まり、現在はそのメンバーで運営しています」と星氏とともに外向で兼務にあたる前田有香氏は語る。前田氏は同社経営企画本部 経営企画部 経営企画セクションと、日本車い

すラグビー連盟の企画委員会を兼任している。



前田氏

「15名は、それぞれの知見を生かして選手の食事メニューを考案したり、デザイナーが車いすラグビー関連のグッズなどのデザインをしたり。またプロジェクトの役割分担でも、食材支援をメインに行うチームと、社内での一体感醸成を担当するチームの2つがあり、後者では応援や観戦の案内をしたり、社内イベントを企画したりとさまざまな活動をしています。」(前田氏)
「実際に関わってみると、思っていた以上にパラスポーツにはそれを支えるための役割がたくさんあり、人手もたくさん必要だと体験的にわかるはず。競技の魅力や奥深さを知るためにも、実際に触れることがきわめて大切であり、早くまた活発にパラスポーツの体験や交流ができる日が来てほしいですね」(星氏)



オンライン観戦会の様子

社内兼業を可能にする柔軟な人事制度

パラスポーツ支援の活動が、オイシックス・ラ・大地の業務や社員に与えた影響はさまざま。たとえば、それまで接点なかった部署の社員同士が共通のプロジェクトで活動することにより、刺激やシナジーが生まれたり、ダイバーシティ感覚の育成に大きく寄与しているという。とはいえ、人材を外向させることはそう簡単ではない。オイシックス・ラ・大地の場合は、もともとの社風として副業が認められているなど人事制度が柔軟であり、社員のやりがいを重視する企業文化が影響しているという。



練習の見学会で運営を手伝う社員の様子

「日本車いすラグビー連盟の活動をしていると、当社の事業だけでは絶対にお会いすることのなかったような業種や企業の方と交流する機会が生まれます。その出会いや経験が、本業のアライアンスに役立つことも少なくありません。当社のように外向まで行く企業は現段階では少ないかもしれませんが、今後増えていくといいなと思います」(星氏)



パラスポーツとビジネスを連携させ、双方の発展に寄与させている同社。他のスポーツでも企業が外向など積極的にサポートすることで、その分野でも新たな価値が生まれるはず。オイシックス・ラ・大地は、そのシナジーを生んだ企業の好例として、今後ますます注目されていくだろう。

今後の取組について

フードロスやアップサイクルなど食分野におけるSDGsの取り組みをより積極的に展開させるほか、スポーツ全般の食を支える活動を広げて、アスリートの栄養学やパラスポーツの視点を取り入れ活用することで、より新しい価値も生み出していきたい。